

明治学院校歌と島崎藤村 —1906年の緑葉—

嶋田彩司担当

◇藤村に関わる毀誉褒貶、もしくは藤村文学についての好き／嫌い

*芥川龍之介…彼 [芥川自身のこと：嶋田注、以下同] は「新生」の主人公ほど老獪な偽善者に
出会ったことはなかつた（遺稿『或阿呆の一生』46）

*正宗白鳥…『『新生』について]その恐怖焦慮煩悶が現実の人間苦として我々の胸を打つのだ（「島
崎藤村」）

*伊藤整は藤村の文体について、「物事を明確に言わず、暗示的に言い、しかも圧力が強く、強
引である」（「藤村の発想方法」）というが、これを承けて剣持武彦は「この口ごもるような、はっ
きりものを言いきらない表現に独特の詩を感じ風韻を感じるものは藤村の文学の好きな読者で
ある。この文体にもったいぶった感情の誇張を読むものは藤村の文学の嫌いな人である」（「批
評と論争」）と解説する。

◆明治学院校歌 作詞：島崎藤村 作曲：前田久八（東京音楽学校講師）

人の世の若き生命（いのち）のあさばらけ／学院の鐘は響きて／われひとの胸うつところ／白金
（しろかね）の丘に根深く／記念樹の立てるを見よ／緑葉は香（にほ）ひあふれて／青年（わかもの）
の思ひを伝ふ／心せよ学びの友よ／新しき時代（ときよ）は待てり／もろともに遠く望みて／おのが
じし道を開かむ／霄（そら）あれば霄を窮めむ／壤（つち）あれば壤にも活きむ／ああ行けたたかへ
英雄（おお）しかれ／眼さめよ起（た）てよ畏（おそ）るるなかれ

◆1906年の藤村と校歌の作詞

1906（明治39）年6月3日、明治学院の教諭兼同窓会の事務を受け持っていた宮地謙吉が、井深梶
之助総理（現在の学院長に相当）の意向を受け、島崎藤村の居宅がある西大久保を訪ねて校歌の作
詞を依頼した。

このとき藤村は34歳、家族は平屋一戸建て、六畳と三畳の小さな家に住んでいる。経済的に困窮
し、妻冬（フユ）の実家から400円（自費出版の費用として）、信州佐久の素封家神津猛から150円（生
活費として）の借金を背負っていた（当時公務員の初任給が月額50円）。

藤村は前年の4月に小諸義塾（現長野県小諸市）の教師を辞め、妻冬と三人の娘をつれて上京し
たが、直後の5月6日に三女が急性脳膜炎で死去し（なお10月に長男が誕生している）、この年（1906）
には4月に次女が急性消化不良にて死去、長女も危篤入院中であつた（6月12日に結核性脳膜炎で死
去）。妻の体調も思わしくなく（栄養失調による鳥目等）、加えて夫婦の関係も円満とはいえなかつ
た（後掲「水彩画家」『家』等を参照）。

一方、藤村は、1897（明治30）年の第一詩集『若菜集』をはじめとする詩作から小説への転身を
試み、その成果として最初の長編小説『破戒』をこの年（1906）の3月に自費出版している。『破戒』
は夏目漱石に「明治の最初の小説」と激賞されるなど大きな反響を呼び、これにより藤村は一流作

家としての文学的地位を確立する（藤村の自然主義作家としての地位は今日でも揺るがない）。

私生活上の不幸と文学活動の成功。文学のために子どもを犠牲にしたという風評も立った。1906年の藤村は明暗両面において特筆すべき生涯の一時期を迎えている。

宮地謙吉の校歌作詞依頼について藤村はつぎのように応えたという。[本学元教授平林武雄の「校歌制作の端緒」（1971年5月発行『白金通信』第27号）に拠る。平林は『白金学報』第9号（明治39年7月）を参照したが、嶋田は原本未見]。

とても堂々たる明治学院の校歌など作るの力なし。しかれども学院はわが母校、保育所、わが恩あるところなり。もし予の力にて及ぶことなれば、全力を尽してこれを編作せんこと、わが義務にしてまた名誉なり。予、快く諾せん。幸いに総理閣下以下の意に叶う良作を得ば、願はくはこれを常に歌ふて、学生の精神を鼓舞せられんことを希望に耐えず。（読みやすさを考え、一部漢字をかなに改め、句読点を補った。以下同）

◆島崎藤村 略年譜

1872（明治5）

3月25日、筑摩県馬籠村（現岐阜県中津川市）に生まれる。四男三女の末子。本名春樹。島崎家は木曾街道馬籠宿の本陣・庄屋をつとめた家柄で、父正樹は十七代当主に当たる。明治維新により没落したが、伝統と矜持をもつ旧家に育った藤村には、上京後に身につけた近代的価値観と養育環境に由来する前近代的価値観が同居、併存しているといつてよい。

一族の多くは経済観念を欠いたまま事業に着手し、失敗して零落、精神上の病を得る者もでている。藤村は自らに流れる血筋に自覚的であり、日常においてことさらに慎重で計画的な生活を心がけていたとされるのも、奔放無軌道な血統への恐怖がそのような生活を強いたのかもしれない。

なお、父正樹には異母妹とのインセストがあったとされており（西方四方『島崎藤村の秘密』）、藤村は所謂「新生事件」（1912年参照）のち、「（父を）弱い人間の一人として、以前にまさる親しみをもつて彼の眼に映るやうに成った」（『新生』）と受けとめつつ、自らの中にも潜む激情（特に性的なもの）を「心猿」（煩惱や情欲のために心が混乱すること）の語をもって自覚し、苦しんだ（苦しむこと自体が藤村の生命力の根幹をなしていたともいえる）。*容儀、礼節、これらのものは吾等に与へられたる高尚なる利器なり。…しかれども…枕をたたいて終夜眠るあたはざるに及んで池水 [心の水：嶋田注] 活動し、心猿悲鳴す。（1895年の随筆「村居謾筆」）

*厳粛な宗教生活を送つた人達の生涯を慕ふ傍から、自分の内部に萌して来る狂じみたものを、自ら恣にしようとしてしかもそれが出来ずに苦しんで

るるやうなものをどうすることも出来ないやうな心が起つて来た（『桜の実の熟する時』）

藤村の親友蒲原有明は「藤村君の言葉はいつものとほり結局は限りなき人生の愛慾といふことに落ちていつた」（『飛雲抄』）といい、田山花袋は「島崎君ぐらゐ性慾に苦しんだ作家はないと言つて好いだらうね。…島崎君の作は、どれを繙いて見ても、性慾の匂ひが盛にしてゐるぢやないか」（『近代の小説』）と書く。また、評論家の平野謙は「藤村ほど石橋をたたいてわたった要心深い人もいなければ、また藤村ほど大胆に身をすててその生涯の曲がり角を通過した人もない」と評している。

1881（明治14）10歳

姉夫婦を頼って上京、有楽町の泰明小学校に転入。

1886（明治19）15歳

父正樹、皮相な文明開化の世相に憤りつつ狂気に陥り、馬籠の座敷牢で死去（『夜明け前』の青山半蔵のモデル）。

藤村、木村熊二（台町教会牧師。女子教育の先駆者として明治女学校を創設。のちに信州小諸に小諸義塾を開校する）から英語を学ぶ。

1887（明治20）16歳

明治学院に入学（～1891）。ミッションスクールの華やかな生活を楽しむ。明治学院は、東京一致英和学校、東京一致神学校、英和予備校が合同して開校し、この年白金に新校地がひらかれた。藤村は第一期生として入学した。なお、藤村在籍中の校歌は、和蘭改革派教会によって開校されたラトガース大学（アメリカ・ニュージャージー州）の校歌の歌詞を一部入れ替えたもので、メロディも同一であったとされている。

*何事も自分の為たいと思ふことで為て出来ないことは無いやうに見えた。…彼は自分の好みによつて造つた軽い帽子を冠り、半ズボンを穿き、長い毛糸の靴下を見せ、輝いた顔付の青年等と連立つて多勢娘達の集る文学会に招かれて行き…（『桜の実の熟する時』）

ただし、1889（明治22）年を境に、藤村は一転して無口で内向的な生活態度をみせるようになる。一説には第一高等中学受験の失敗が原因とも、享樂的な生活を友人に注意されたからともいわれている。

*今まで自分が思考して居たことは皮相に過ぎなかつたと思つて、文学とか宗教とかいふ方に心を潜めるやうになつてしまつた。（『明治学院の学窓』）

*僕は…一時はもう誰にも口を利くまいと思つた。（『桜の実の熟する時』）

1888（明治21）17歳

木村熊二によりキリスト教の洗礼を受ける。

*年の頃およそ五十ぐらゐで親しい先生のやうでもあれば可畏（こは）いお父さんのやうでもある肉体を具へた神であつた（『桜の実の熟する時』）

- ただし、藤村の信仰心については疑問を呈する声が多い。1893年の輔子との恋愛と辞職に際して、教会を離脱している。
- 1892（明治25）21歳 明治女学校の英語教師になる。教頭の巖本善治のつてで『女学雑誌』に投稿するようになり、その縁で北村透谷と知り合う。
- 1893（明治26）22歳 教え子佐藤輔子に愛情を寄せるが、婚約者のいる女性との恋愛は断念せざるを得ず、やがて辞職。
関西漂泊の旅に出る。なお、佐藤輔子は翌年嫁ぎ先の札幌で病死。
この年、『文学界』（浪漫主義を代表する文芸雑誌。透谷、藤村の他、戸川秋骨、馬場孤蝶等、明治学院の同級生も同人であった）創刊。
- 1894（明治27）23歳 明治女学校に復職。5月、北村透谷自殺。
- 1896（明治29）25歳 東北学院の教師となり、仙台に移住。詩作にふけり、優れた近代詩を『文学界』に発表する。後に、藤村はこの仙台時代を「春」や「生の曙」の語で振り返っている。藤村の生涯（前半）のなかで、もっとも心安らかな時期であった。
- 1897（明治30）26歳 上京。第一詩集『若菜集』。明治ロマンチズムの達成として名高い。自然の運行と人生を重ね合わせて、「春」の賛歌を歌い上げたもの。『若菜集』こそは藤村の青春であった。しかし、そこに「夢」「春の夜の夢」の語が頻出することを見逃せない（夢は醒めてのちにはじめてそれとわかる。しかし醒めてのち、夢の時間への再度の参入はかなわない）。
- 1899（明治32）28歳 小諸義塾の教師（英語・国語）となる。冬子（22歳）と結婚。冬は函館の裕福な網問屋の娘で、藤村にとっては明治女学校の教え子にあたる。父秦慶治は明治学院の有力な後援者の一人であった。
*折目正しいじみな木綿のお着物で風呂敷包みを抱き…静にお通ひになるお姿を、かはるがはるその硝子からのぞいて見ては、「えらい先生だつていふよ、詩集が出てゐるつて、こんな田舎などへいらつしやる先生ではないんだつて」などと驚異と尊敬をこめて話合つたことでございます。（当時を知る小諸住民の述懐。塩見鮮一郎『破戒という奇跡』からの転載）
*小柄の細つそりとした、お顔も細面の若く美しい方が、手桶に水を入れて重さうにさげて行かれます。…毎日水汲みにお通りでした。（同上）
やがて夫婦には長女（1900）、次女（1902）、三女（1904）が誕生する。
この時期、藤村は詩から散文に関心を移し、いくつかの習作を発表している。
*小説が私の思想（かんがえ）を現すに最も相応しい形だと思ふから小説を書くので…近頃韻文から散文に移つた人が大分ある様ですなえ。皆韻文ではその思想を云ひ現すことが出来なくなつたのでせうよ。（「緑蔭雑話」、

読売新聞1906年4月)

*ふと、筆筒の上にある手紙を取上げて…読んでみる。御手紙が届いた、この頃の御無沙汰も心よりする訳ではないと書いてあつた。…薄い縁を思ふ度に、枕紙も涙にぬれると書いてあつた。今は死んだとあきらめてくれよ、残るは君を慕ふ心ばかりと書いてあつた。「絶望の初子より、恋しき直樹さまへ」と書いてあつた。

愕然として、愕然といふよりは茫然として、「絶望の初子」と叫んだ。(中略)「待て、お初を離縁しておいて、清乃さんと交際を続けていると思はれるのは厭だ。清乃さんと交際を断つのが第一だ——噫、絶交、絶交」(中略)ああ、新しい家庭も、新しい交際も……すべては空の空に思はれた。…今日までに果たして何が残つたであらう(『緑葉集』所収「水彩画家」より)

*蒸すやうな八月の景色は眼前に緑葉の嘆きを見せました。(中略)

「噫、私は学問なぞをしなけりやよかつた。——新しい智慧の味さへ知らなかつたら、母の言ふなりにどんな男でも夫にもつて、一生満足していられたらうものを。私は教育なぞを享けなけりやよかつた。——精神を自由なものとなさへ知らなかつたなら、かうして籠を出て飛んで見ようとは思はなかつたらうものを。」(『緑葉集』所収「老嬢」)

1904 (明治37) 33歳 〈日露戦争〉 この頃の信州各地での被差別部落取材がのちに『破戒』に結実する。

9月『藤村詩集』(4詩集を合本したもの)。

*遂に、新しき詩歌の時は来ぬ。／そはうつくしき曙のごとくなりき。…おのがじし新しきを開かんと思へるぞ、若き人のつとめなる。／生命は力なり。力は声なり。新しき言葉はすなはち新しき生活なり。われもこの新しきに入らんことを願ひて、多くの寂しく暗き月日を過しぬ。…われは今、青春の記念として、かかるおもひでの歌ぐさきあつめ、友とする人々のまへに捧げむとはするなり。(序)

1905 (明治38) 34歳 上京。西大久保に住む。三女死去。10月長男誕生。11月『破戒』完成。

1906 (明治39) 35歳 3月25日『破戒』自費出版。好評を得て半月で増刷【初版本】。4月次女、6月長女が死去。10月浅草新片町に移転。この年、明治学院校歌を作詞。

◇藤村は5月生まれの子を「みどり(緑)」と名付けた。そのみどりが6年ほどの短い生涯を閉じた1906年の夏(7月)、神津武宛の手紙に、翌年に出版される短編集の書名を『緑葉集』とすることがはじめて記される。亡児を悼む心情とそのときの出版物の名称の一致を偶然の符合とみるこ

とはできない。そして、同時期に藤村が作詞した明治学院校歌にも「緑葉は香 ひあふれて 青年の思ひを伝ふ 心せよ学びの友よ 新しき時代は待てり」とある。

⇒緑葉は新緑の季節を表す語である。若々しい自然のエネルギーを感じさせる。しかしその季節は、はや春を過ぎて夏である。

春（それは藤村にとって『若菜集』の季節であり、そこにうたわれる「夢」の時間であり、学院校歌にいう「若き生命のあさぼらけ」＝命の曙でもある）は過ぎ、無邪気な「春の夢」の時代を「青春の紀（記）念」（上掲『藤村詩集』序）として、ときには苦い思いで振り返らざるを得ない時季である。

⇒『緑葉集』には男女を問わず「夢」にやぶれた若者たちが描かれる。「緑葉の嘆き」（上掲「老嬢」）とは、作中の者たちが捨て去った「春の夢」の残滓を眼前にしての感慨である。藤村は娘たちの墓参をして次のように書く。

＊家から墓地へ通ふ平坦な道路の両側には、すでに新緑も深かった。…彼は自分の心によく似た憂鬱な色を見つけた。（『家』より）

つまり、「緑葉の嘆き」は、愛児の死亡や妻との不和、生活の困窮とその背後にある自らのエゴ（「心猿」）に対する藤村の嘆きでもあった。

⇒そして、藤村は明治学院の「記念樹」の「緑葉」に憩う「青年」（学生達）に「心せよ…新しき時代は待てり」と呼びかける。

しかし、とはいえ、この「新しき時代」の語がかならずしも輝かしい未来を指し示すとはかぎらない。むしろそれが学院を巣立ったのちに「人の世」で「青年」が直面するであろう苦難を含蓄するのだとすれば、「心せよ」の語は重い。

『緑葉集』の序に藤村は「人生は大なる戦場である」と書いている。校歌のさいごを「ああ行けたたかへ雄雄しかれ 眼さめよ起てよ畏るるなかれ」と結ぶのは、藤村の「人の世」を生きることのむずかしさについての実感が導いたことばであると考えてみる。

⇒なお、これについて『新約聖書』コリント前書第十六章十三節の「目を覚し、堅く信仰に立ち、雄雄しく、かつ剛かれ」との類似を説く説もある（『斎藤勇著作集』）。近似した表現をさがすことにどれほどの意味があるのか不明ながら（日露戦争という時局柄、このような勇ましいことばは巷にあふれていたとも考えられる）、『破戒』にも「社会（よのなか）」に容れられない父が丑松に与えたことばとして「行け、戦へ、身を立てよ」と書くように、過酷な私生活の直中にある藤村にとって生きることは自他との戦いであったということを理解すればよいものと思われる（実際に藤村がよく戦い得た人であったかどうかについては後述する）。

＊（ただし、校歌後半の一般的あるいは常識的な解釈は次のようなものであろう）

五行目は一転して、「心せよ」と学びの友に呼びかけ、「新しき時代は待てり」と断定している。

…この響きは、あの「遂に新しき詩歌の時は来たりぬ」[上掲『藤村詩集』序]と言い切った

ところと一致しないだろうか。「詩歌」を「青年」と置きかえることができるだろう。「来たりぬ」でもよいが、将来ある青年に思いを伝えるには「待てり」とするほうが適（ふさ）わしかったのだろう。誰もが遠い未来に希望を抱いて、おのがじし新しい時代の道を切り開いていってほしい願いが込められている。(村上文昭「藤村と明治学院校歌」、『島崎藤村研究』第25号より引用)

1907 (明治38) 36歳 短編集『緑葉集』。次男誕生。

1908 (明治41) 37歳 『春』を朝日新聞に連載、10月刊行。

1909 (明治42) 38歳 『新片町より』。三男誕生。

1910 (明治43) 39歳 『家』読売新聞に連載、翌年刊。四女出産後、妻冬子出血のため死去。〈大逆事件 日韓併合〉

上掲「水彩画家」の一件は、『家』にも取り込まれ、夫三吉、妻お雪の名で描かれる。三吉はお雪の謝罪を容れて和解するが、三吉は心からの愛情をお雪に感じているわけではない。

そして連載中に冬子が死去する。ただし、藤村は妻の死を『家』には書いていない。作品の最終近く、藤村は次のような場面を書く。

＊子供等が寝沈まつた頃、お雪は何か思出したという風で、いつにない調子で、「父さん、私を信じて下さい……ネ……私を信じて下さるでせう……」と夫の腕に顔を埋めて、しまひには忍び泣に泣だした。「何を言出すんだ——今更信じるも信じないもないぢやないか」と三吉は言はうとしたが、それを口には出さなかつた。彼は黙つて、嬉しく悲しく妻の啜泣きを受けた。(『家』)

この場面は、次作『新生』のなかでも岸本の追憶として繰り返し描かれる。そしてそのなかで藤村は、「十二年間もかかつて漸く自分の妻とほんたうに心の顔を合わせる事が出来た」(『新生』)と書いている。

1912 (明治45) 41歳 『千曲川のスケッチ』。家事手伝いに来ていた姪のこま子と関係(「新生事件」)。こま子は次兄の娘で、姉妹で藤村宅の手伝いに来ていたが、姉が結婚後に藤村との間に肉体関係が生じた。こま子の『悲劇の自伝』によれば1912年5月だという。こま子は妊娠。

1913 (大正2) 42歳 藤村はこま子との関係清算のためパリへ渡航する(3年間フランス滞在)。費用を捻出するために『破戒』『春』『家』などの版權を新潮社に2000円で売却。香港から次兄に手紙を書き、謝罪して事後処理を頼んだ。こま子の産んだ子は子のない夫婦にもらわれた。上掲書の中で、こま子は「あの小説『『新生』: 嶋田注』は殆んど真実を記述している。けれども叔父に都合の悪い場所は可及的に抹殺されている」と書いている。

『桜の実の熟する時』を『文章世界』に連載（1919刊）。

- 1917（大正6） 46歳 帰国。こま子との関係再燃。長兄たちの怒りを買う。
- 1918（大正7） 47歳 『新生』を朝日新聞に連載（1919刊）。こま子は長兄のいる台湾へ。
- 1922（大正11） 51歳 『藤村全集』十二巻を刊行。
- 1928（昭和3） 57歳 加藤静子と再婚。静子は藤村が援助した婦人雑誌『処女地』の編集助手をつとめていた。
- 1929（昭和4） 58歳 『夜明け前』を『中央公論』に連載開始。新潮社『現代長篇小説全集』第六巻『島崎藤村篇』を刊行。
- 1932（昭和7） 61歳 『夜明け前』第一部刊行。
- 1935（昭和10） 64歳 『夜明け前』第二部刊行。日本ペン倶楽部初代会長に就任。
- 1937（昭和12） 66歳 <盧溝橋事件 日中戦争> 麹町に転居。こま子、養育院の報道あり。

こま子は本土に戻り、京都で社会科学研究所の炊事婦をしていたが、社会主義運動者長谷川博と知り合い、一女をもうける。やがて長谷川博は地下に潜伏。こま子は子連れで上京、過労と栄養失調で倒れ、板橋区の養育院に運び込まれる。

*…長谷川こま子（四四）という一婦人が収容された。病にやつれた見る影もない姿であるが、どことなく気品のある容貌、インテリらしい物腰に同院の係員も謎の収容者として不審がついていたところ、五日になつてこの婦人こそ文壇の巨匠、島崎藤村の代表作『新生』に女主人公「節子」として現れる藤村氏の姪、島崎こま子さんの、それから二十年後のうらぶれの姿であることがわかり、知る人をして暗然たらしめた。（1937年3月6日、東京日日新聞。青木正美『知られざる晩年の島崎藤村』より転載）

世間の同情は姪こま子に集まり、藤村は偽善とエゴのかたまりとして非難される。藤村は夫人（再婚した静子）に見舞金を持たせて病院に行かせたが、夫人は病室に入ることができず、守衛室に預けて帰宅。これがさらに藤村批判を強くした。藤村は心身消耗により病臥、帝国芸術院の会員に推挙されたが辞退を余儀なくされる。

その後、こま子は子どもと練馬で暮らしていたが、晩年にはひとり木曾の妻籠で共産党員としての活動をしていたという。最晩年に再度上京し、中野の都営団地に住み、1969年に没した（享年85）。

- 1939（昭和14） 68歳 新潮社、『定本版藤村文庫』として『破戒』刊行。「身を起すまで」の副題【再刊本】。
- 1941（昭和16） 70歳 大磯に移住。<太平洋戦争（大東亜戦争）>

1942（昭和17）71歳 日本文学報国会が結成され、名誉会員となる。11月、第一回大東亜文学者大会でバンザイの音頭を取とる。

1943（昭和18）72歳 『東方の門』連載中の8月脳溢血で死去。

◆島崎藤村『破戒』

【梗概】瀬川丑松は長野の師範学校を卒業し、飯山の小学校教師を務める24歳の青年。小諸の被差別部落出身（本文：丑松もまた穢多なのである）であるが、父の「隠せ」との命にしたがって、周囲にそれと覺られないよう用心深く暮らしている。一方で、丑松は同じく被差別部落出身で解放運動にたずさわる猪子蓮太郎（長野県飯田市出身の大江磯吉がモデルとされている）を知り、出自を隠さないその生き方に惹かれ、煩悶する（本文：聞けば聞くほど、丑松は蓮太郎の感化を享けて、精神の自由を慕わずにはいられなかったのである。言うべし、言うべし、それが自分の進む道路では有るまいか。こう若々しい生命が丑松を励ますのであった。（略）何故、新平民ばかりが普通の人間の仲間入りが出来ないのであろう。何故、新平民ばかりこの社会に生きながらえる権利が無いのであろう）。

やがて父の不慮の事故死を潮目にして、丑松の素性が露見しそうになる。丑松は蓮太郎に自らの出自を打ち明けようとするが、その矢先、蓮太郎が撲殺されてしまう。丑松は教室で生徒にむかって告白を決意する。

（本文）「皆さんも御存じでしょう」と丑松は噛んで含めるように言った。「この山国に住む人々を分けて見ると、大凡五通りに別れています。それは旧士族と、町の商人と、お百姓と、僧侶と、それからまだ外に穢多という階級があります。

…その穢多が皆さんの御家へ行きますと、土間のところに手を突いて、特別の茶碗で食物などを頂戴して、決して敷居から内部へは一步も入られなかったことを。…御茶は有ましても決して差上げないのが昔からの習慣です。まあ、穢多というものは、それ程卑賤しい階級としてあるのです。…実は、私はその卑賤しい穢多の一人です」…こう言って、生徒の机のところに手を突いて、詫入るように頭を下げた。

「皆さんが御家に御帰りに成りましたら、何卒父親さんや母親さんに私のことを話して下さい。…今まで隠蔽していたのは全く済まなかった…全く、私は穢多です、調里です、不浄な人間です」…丑松はまだ詫び足りないと思ったか、二歩三歩退却して、「許して下さい」を言いながら板敷の上へ跪いた。…

かつて丑松が目撃した、被差別部落出身者ゆえに郷里を追放された大日向という人物がいた。大日向はアメリカのテキサスに渡り農場経営に成功し、青年の派遣を求めてきた。学校を辞めた丑松はテキサス行きを決断する。

（本文：ああ、ああ、二六時中忘れることの出来なかった苦痛は僅かに胸を離れたのである。

今は鳥のように自由だ。)

◇藤村はのちに「破戒」の主題を「眼醒（めざ）めたものの悲しみ」と表現している。しかし、丑松の眼醒めは結局「社会（よのなか）」との対決に向かわない。その意味で藤村は、眼醒めつつも正義を貫いて生きることが出来ない者の悲しみを書いたのだといってよい。そのような社会との対決の回避を「卑怯」な逃走と受けとるか、逃走する自己を正直に書いた「誠実」な告白と受けとるかで、「破戒」の評価は二分され、同時に藤村という人間への評価・好悪の感情にも結びついている。

「破戒」の丑松はさいごにテキサスへと向かう。その作者藤村は、教え子との恋愛を断念し、教職を辞したあとで「関西漂泊の旅」に出かけ、姪とのあやまちのあとには3年間フランスに滞在する(新生事件)。両者は直接的なものではないにせよ関連しているように思われる。これらは「無責任な逃避行」であろうか、その無責任さについての「誠実な懺悔」であろうか。いずれにせよ、藤村はわかりにくい人である。校歌にいう「人の世」との「戦」いの不透明さについて、藤村研究家の十川信介は次のように述べている。

*文明開化のさなかに木曾の山中から上京し、キリスト教思想やヨーロッパ文学に共鳴した人間が、強い意思とたゆまぬ努力で桎梏からの解放をめざしながら、逆にそこにからめとられ、その体現者であるかに見られるのはなぜであろうか。

彼は漱石や鷗外ほど透徹した洞察力や鋭敏な自意識を持ち合わせてはいないし、先達・透谷のようなはげしい批判力にも欠けている。その意味では、彼はきわめて通俗的・常識的な精神の持主であり、彼らにくらべて卓越した見識を示したわけでもない。にもかかわらず、彼が読まれなければならない理由もまたそこにあると言ってよい。一方から見れば自己解放のねばり強い努力でもあり、他方から見れば妥協・屈服でもあるような彼の不透明さにこそ、明治以来の平均的な知識人を代表する特質が示されているからである。

その長い文学的生涯を通じて、彼はたえず自分の個に執着し、自分の家系をみつめ続け、最後に『夜明け前』においてわが国の近代化の問題に到達した。観念に走らず、自分の足もとを掘り下げて、ついに「日本」というひろい地点に達したときに、彼にはどのような眺望がひらけていたのだろうか。その道程を辿って行くことは、彼の不透明さや、あえて言えば巨大な俗物性のゆえに、私たち自身の中に生きている「日本的」なものの正と負を探ることと重なり、私たちにとっての「近代」を内側から問いなおすことになるはずである。(『鑑賞日本現代文学④ 島崎藤村』所収、「藤村について」より)